

文芸研二年入

2023年6月2日
—NO. 163—

発行 文芸教育研究協議会
編集 文芸研事務局



久々となる対面での実践研(12月)

卷頭	辻委員長より	・	・	・	・	・	・	1
迫る山口大会に向けて現地より	・	・	・	・	・	・	・	
初レポーター	実践を終えて	・	・	・	・	・	4	
サークル便り	広島より	・	・	・	・	・	3	
枚方より	・	・	・	・	・	・	・	
青年学校の活動記録	・	・	・	・	・	・	・	
事務局通信	・	・	・	・	・	・	・	
事務局員の妄想日記	・	・	・	・	・	・	・	
12	11	9	8	5				

各地の学習会から山口へ

委員長
辻惠子

● 学習の機会あるごとに大会参加を勧めましよう
一学期のスタートから一ヶ月、皆さんそれぞれが
各地で忙しい毎日をひた走つてこられたことと思い
ます。「やつとゴールデンウイークだ」と心も体も一
休み、そんな状態だったのではないでしようか。で
も、そんな中でとにかく学習の場を創ろうと、リア
ルで集会を開いたり、オンラインで学習会をもつた
り、またそこまでできなくても例会を開いて一緒に
学んだり、これまでコロナ禍の影響で休止してい
た活動がそれぞれの地で始まつた一ヶ月だったよう
に思ひます。

夏の大会開催地・山口では、4月8日に大会と同じ県教育会館でプレ集会が開かれました。私も伺つて、清田さんを中心としたサークルの皆さんのが熱意を肌で感じ、数少ないメンバーでがんばつてくれました。皆さんもサークルみんなで動員目標を再度みて、何とかその達成に力を尽くしてください。まずはこれから機会あるごとに、周りに声をかけていき

ましよう。サークル員はもちろん、サークルに近い人、以前少しども関わりのあつた人にはぜひ「ひさびさのリアル開催だから、行きましょう」と思い切って誘つてみてください。また「山口まではちょっと」という人には、「オンラインでも参加できるよ」と勧めましょう。

● 今こそ「子どもの権利」を語り合いましょう

最近気になるのは、どの教室でも子どもと教師が授業の開始に「よろしくお願ひします」、最後に「ありがとうございました」と声をそろえていうことです。わたしは少人数指導担当として、1・2年生の8クラスにいくのですが、その「よろしくおねがいします」「ありがとうございます」のない学級はたった一学級のみ。そこでは、日直が『これから〇時間目の学習を始めます。(終わります)』と声をかけて、みんなが『はい』と応えるだけ。わたしもずっとそうでしたので、それでいいじゃないかと思います。そもそも子どもは授業を受ける権利があり、その「授業」は子どもと教師が共に創るものであるはずです。お願ひしたりされたりするような、或いは礼を言つたり言われたりするような関係にあるとしたら、それこそおかしいのです。

と、まあこれは一例で「○○校スタンダード」「○校のやくそく」と、表現はさまざまですが、細かく子どもをしばる規定が皆さんの中にもあります。もちろん、中にはもしかしたら必要なこともあります。あるかもしれません、「ちょっと待つて」と言いたくなるような決め事がなぜか当たり前のように書かれてはいいでしようか。

日本が「子どもの権利条約」を批准した1994年から約30年がたち、2023年、この4月から「こども基本法」が施行されます。子どもを権利の主体として捉えていくよう、まずは教師の子ども観を変える必要があります。職場の先生たちと「子どもの権利条約」を読み直し、子どもたちとともに「子どもの権利」を考える機会がもてるといいですね。「人権」が軽んじられるこの国で、教師の私たちだからこそできる、大事な一步です。



迫る山口大会に向けて現地より

全国大会での学び

「山口大会で楽しみなこと、

期待すること

文芸研山口東サークル 大田晃司

金よう日の五じかんめがとてもつかれました。

一年生のクラスの女の子が書いた宿題の日記を読んだとき、ふと、第五十六回全国大会の作文の入門講座で、斎藤鉄也さんの実践から教わったことを思い出した。うまい作文よりも、相手に伝えたい思いを伝えることが重要で、教師が子どもをまるごと受け止め、表現の意味を見出すことが大切だと学んだ。よく見ると、普段は丁寧な字なのに、曲がりくねつた字で、一文で力尽きたように書いてあつた。よっぽど疲れていたんだな。一文で書いてあるからこそ、疲れ切っている気持ちがよく伝わるな。と、妙な意味づけをして、心の中で笑っている自分がいた。もし、あの入門講座で学んでいなかつたら、たつたの一文しか書いていないことを叱り、書き直しをさせ

ていたかもしれない。全国大会での学びを実感した瞬間だった。

三年ぶりのリアル開催となる第五十七回文芸研全国大会（山口大会）が近づいてきた。今年も、どんな新たな学びが待っているか、わくわくしている。注目は、二日目の五年分科会で、広島サークルの吉田剛人さんが提案発表される新教材「たずねびと」の実践だ。戦争や原爆を知らない世代である子どもたちが、戦争や原爆、平和について思いや考えを深めることを願った実践である。広島サークルは、「文芸教育127号」から連載中の「ヒロシマ発 平和教育の今」において、ヒロシマについて学ぶことの意味を、思いを込めて発信されている。ロシア軍によるウクライナ侵攻が収まる気配を見せない現状の中、今回の全国大会（山口大会）が、ヒロシマの学びを全国各地に広げるきっかけになることを期待している。

全国大会では、参加者同士が直接会って話すことで、気軽に質問や悩み事などの話ができたり、ご当地ならではの楽しみ（温泉やグルメなど）を味わったりできると思う。多くの参加者が集い、学ぶ仲間が増える機会となることを願って、大会に向けた準備を万全にしたい。

初レポーター 実践を終えて

東京文芸研 田形智

文芸研に出合つたのは臨時講師のときでした。新読書社から発刊されている「教科書指導ハンドブック」シリーズを読み、「これは面白い!」と思つたことがきっかけです。その後、青年学校の存在を知り、2期4年間、お世話になりました。

初めて参加した青年学校のことです。ある物語文について班で話し合つたことを、私が発表しました。するとその回の講師であつた山中吾郎先生が、「初めて参加した人でも、文芸研の理論を学べば、ここまで深く読めるのです。」と仰つていたことがとても印象に残っています。もつともつと文芸研を学んでいければ、より一層、国語が楽しくなると思いました。

国語という教科は他の教科と比べ、考え方や指導法が多様にあると思います。文芸研の他にも、読み研方式、一読総合法、分析批評などなど、数え上げればきりがありません。その中でも、文芸研の教材分析は一級品だと思います。文芸研との出会いから数年が経ちましたが、文芸研の理論の理解は道半ばです。

研の皆様には大変お世話になりました。特に上西先生には、先を見据えて計画を立てて頂きました。例えは『お手がみ』の実践の前に、『おおきなかぶ』も東京文芸研で発表してみたら? と提案してくださいました。そのときは大変でしたが、今思えば、『おおきなかぶ』での実践をもとに『お手がみ』に取り組めたので、非常に勉強になりました。

『お手がみ』は光村図書や学校図書では2年生の教材として扱われています。しかし私が所属する市が採択している教育出版は1年の最終単元として「お手がみ」を載せています。「1年生にこのお話の面白さが分かるだろうか。」と考えながら授業をしました。実践記録を今読み直してみると、2年生ほどではないにせよ、1年生なりに頑張って読んでいたことが分かり、嬉しく思います。

最後になりますが、今回の一回のレポートが価値あるものだとするならば、それは東京文芸研の皆様のおかげです。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。



サークル便り 広島より

他サークルと繋がる「国語の教室」

広島文芸研広島サークル 砂島裕子

広島における現在の「国語の教室」について報告します。

今年1月9日、久しぶりに対面での「国語の教室」を計画しました。すると、市民教（広島市民間教育サークル会議）から向井さんに「学習会を文芸研で引き受けてもらえないだろうか」という話があり、それはちょうどよいと「国語の教室」を市民教共催で行うことになりました。

その日の昼食を他サークルの人ととつたのですが、その時、4月の学級開きの学習会が毎年、同日同時に間に帯にかかることが多かつたという話になりました。そこで、4月の学習会の日時を、向井さんが他サークルと調整し、4月9日に、算数サークルと「国語の教室」の共同開催となりました。他サークルとこのように日程を調整して学習会を開けば、お互いの学習会に参加することもできますし、声を掛け合つての参加者も増えると思います。

今回は、担当を1年生が向井さん、2年生と3年

生を砂島、4年生は吉田愛さん、5年生6年生を佐々木さんとしました。1つの学年を約1時間半、しかも2つの教材をするのでけつこう駆け足状態で話しました。

久しぶりの対面での学習会。対面で話しあうと、何かしら「あたたかさ」を感じることです。参加者の小さなうなずきにも息遣いを感じ、あ、ここは聞いてもらっている、共感してもらっている、るとか、ちょっと不思議に思われていると思つた時には、別の言

い方にかえて理解してもらうとか、笑いが起きたりとか、「人」を感じることが多く話しやすかつたです。教材に関連した雑談も出て楽しい雰囲気になる。知らない人だけど隣り合わせだから、いつの間にか仲良くなっている等、対面ならではのことが起きました。

終了後にアンケートを書いてもらいました。一部紹介します。



【低学年】・・・1年生『はなのみち』他・2年生『ふきのとう』『スイミー』

○ 1年生の子どもになつたつもりで、向井先生の

授業を受けることができてたくさん発見がありました。「はなのみち」をこんなに豊かに子どもたちと読んだことはなく、もつたいたなかつたなあと思いました。(今年、まごが1年生、一緒に読めたうれしいです。)学級づくりを国語科でという意味がとてもよくわかりました。

【中学年】・・・3年生『どきん』『まいごのかぎ』・4年生『春のうた』『白いぼうし』

○ 3年生2周目。うまくできるようにと思って参加しました。「どきん」の詩はどう読めばよいのか分からなかつたので、今週こうやろう!という授業のイメージがもてました。真反対の言葉を言ってみたり、叙述にもとづいて「どんな人?」と問い合わせるなど、言葉に注目した読みは取り入れたいなど思いました。

○ 絵本でありながら子どもも大人も教えられる、学ぶことができる、力のある教材だということを再確認しました。ウクライナのことを思つて、これまで以上に深く強く考えさせられる。文学教材つて本当にすごい。それを可能にする文芸研は、子どもたちにとつてとても大切です。

○ 「どきん」の詩、読んだだけだつたのが、先生の話を聞きながら読むと、どんどんの気持ちが広がつて楽しくなつてきました。明後日、授業開きで学習するので、早速、わくわくさせながら、何何?つて読んで、考えさせようと思います。「まいごのかぎ」、初読だつたのですが、とても好きなお話をしました。苦手な国語で参加させてもらつたのですが、授業が楽しみになつてきました。

○ スイミー、ふきのとうの教材の見方、おもしろかったです。教師がどんな願いを持つて行動するかとすることが、お話の本質にもつながつてくるのかなと思いました。専門的な言葉が多くて、ついていくのが大変でしたが、どの教材にも深い意味を見い出せるのだなと思いました。

○ 参加させて頂きありがとうございました。どのように国語の学習を進めていくか悩んでいましたが、相談につて頂き、安心して学習に取り組むことができそうです。

【高学年】・・・5年生『考えるのっておもしろい』

『なまえつけてよ』・6年生『春の河』『小景異情』

○ 国語の用語を知り、大変勉強になりました。用語をもつと知ること

で、子どもたちにしつかりと力をつけられるように思います。教

材文を使つてわかりやすく教えていただけたのがうございました。対比と類比を見つけることが場面をつなぐこと。導入部での発問（何の次の日）で振り返れるなど、これからも使ってみたいと思います。

○ 詳しく教えて頂けてとても充実した時間になりました。実際に授業を受けている児童のように考え、感動しました。心揺さぶられる体験が国語科の授業の中に入り、そしてそのことがより豊かに生きるきっかけになる、すばらしいと感じました。



今も学び続けておられる佐々木先生の姿こそ

が、子どもたち、私たちへの教えだと思います。

これからも佐々木先生から学ばさせてください。

○ 国語が好きではな

いので、チャンスがあれば、文芸研で勉強させていただいています。久々に生の声で教えていただき、すくっと入ってきました。いつものことですが、自分の指導を反省させられます。自分では、ここまで教材研究はできないし、表現にこだわらず読んでしまうので、できればすべての単元を教えていただきたいです。



対面での学習会では、「文芸教育」の説明をしてその場で販売できるし、他サークルの人や他の参加者とも知り合いになり情報交換ができます。ただ、参

加したいのに、都合で会場に来れない人や遠方の人もおられます。誰もが参加できるように、オンライン学習もあわせたハイブリット学習が簡単にできるようになればいいなあとも思いました。

今後、他サークルとも相談して、できるだけ多くの人に周知する方法を考え、お互いの学習会ができるようにしたいと思っています。

ちょこつとだけ枚方サークルの近況

大阪文芸研枚方サークル 松山幸路

枚方サークルでは、国語の教室も例会もこの間基本的にオンラインで開催してきました。しかし、この春から対面に戻していっています。やっぱり対面ってええよなあと呟き合っています。

この写真は、吉村真知子さんのご自宅。サークルのグループLINE



で「皆さん、本いりませんか?」と様々な教育書を次の世代にと呼びかけてくれて、欲しい人で取りに行かせてもらつた時のティータイムです。三十分ほどの滞在。久々にリアルのトークでしたが、しつかりとボケもあるトーキに感動しました。野澤智子さんは、漫才ではツツコミですが、松山とトーキすると、けつこうボケてくることに気付きました。私自身は山中尊生さんとの漫才同様、仕事はツツコミに変わりないので、そんなリアルの気持ちよさを存分に味わつて、吉村亭を後にしました。

ゴールデンウイークには、サークルでBBQ。こんなことを書くと、西郷先生に「お前らはゴールデンウイークこそ勉強しなさい。」と叱られそうですが、一応例会で毎月二回学習しています。

そのバーベキューで、少し真面目な話にもなりました。枚方サークルは、ベテラン勢が引退し始め、主力が四十代になっています。若い先生をサークルに誘つてメンバーを増やしていくないと、ということを話していました。じっくり腰を据えて何かを勉強し続けようという先生が減っている気もしますし、多忙なものもあると思います。でも、教師をやつている者が、西郷文芸学から学ばないのは勿体ないの一言です。システムや形だけの空虚で薄暗い国語が広がる中、文芸の授業はより光ります。その仲間を一人でも増やす努力を

していかなければならぬ枚方サークルです。

青年学校の活動記録

「青年学校18期、

第2回学習会を終えて

青年学校18期
千葉文芸研松戸サークル 編引亮介

「好きなことを好きなだけ書いたらいいんだよ」

この原稿を執筆するにあたり、同サークルの諸先輩方からいただいたアドバイスです。さあ、困りました。普段、感想を書く手がなかなか進まない子どもの横で立ち止まり、「自由に書いていいからね」とささやく教室での自分はなんと残酷なことをしていたのでしょうか。見当違いなことを書いてしまつたら、どうしよう。12月に初参加した冬の実践研で、初めてマイクを握ったときのことが自然と思い出されます。じりじりと迫りくるマイクにあれほどの存在感と恐怖感を覚えたのは、後にも先にもあの日だけです。それまでにも何度かサークルの学習会に参加してきたはずなのに、自分の頭の中で考えて

いることを上手に表現できませんでした。参加されていた先生方が文字通り、輝いて見えました。そこで、「もっと学びたい。そしていつか、この場で認めてもらえるような力を付けたい。まずは基礎基本の知識から学んでいかなくては」と参加した青年学校18期の第2回学習会です。

17期からの引き継ぎで、今はオンラインで開催している学習会。いずれかの折に集まって対面形式でできたらいいね、とメンバー同士で話しています。講師としてお招きしたのは、文芸研委員長の辻恵子先生。いつも松戸サークルでお世話になつている辻先生のお姿を見て、ほつとしました。今回の内容は、「絵本・読書指導」「1年生の文芸の授業」です。

絵本は、じっくりと絵を見せて読むことが大切。できれば画面などに映すよりも、近くに子どもたちを集め、やりとりしながら読んであげたい。と教わりました。ウクライナ民話『てぶくろ』を例に、実際に読み聞かせをしていただきながら学びました。みんなで気付いたことを語り合いながら読む絵本は本当に楽しく、また『類比』や『対比』、『順序』などを考えながら読み進めていくことで、より深く、豊かに味わうことができました。子どもたち

に読み聞かせをするときも、じつくりと絵を見せながら、そして語り合いながら、絵本の世界を十分に味わわせたいと思いました。

なかえよしを『りんごがたべたいねずみくん』を

例にとり、「類比されていることは何か」をテーマ

に小グループで話し合う活動では、実にたくさんの意見が飛び交いました。幼児でも楽しめる絵本であっても、ものの見方・考え方を使うことでこんなにも豊かに意味付けることができるのだ、と感動しました。その感動が冷めやらぬ内に！早速担任している6年生の学級で授業をしました。子どもたちは、興味津々な様子で読み聞かせを楽しみ、その後の小グループでの話し合い活動でも活発に意見を伝え合っていました。ここで、授業後の感想を少しご紹介させていただきます。

「これこそ協力」

みんながりんごを取っていく中、ねずみくんはみんながもつている能力をもつていませんでした。みんなと同じ能力がほしくて、真似してみるも、取れません。

でも、そんなところにあしかくんが現れて、一緒にりんごを取りました。ねずみくんとあしかくんに

しかできないことがあります。それこそが「協力」です。他の動物は自分の力でしか取ることができません。これは、ねずみくんとあしかくんにしかできないことなのです。

「絵本の中の世界と人間の世界」

絵本の中で、とり、さる、ぞう、きりん、かんがるー、さいの六匹は、生まれつきある能力を使つて「りんごを取る」という一つの目的に、周りのことは見向きもせずに取り組んでいました。なので、ねずみくんには、だれも気付きはしませんでした。しかし、ただただ通りかかったあしかくんは、気付きました。この本の終わり方は、何も考えずに読んでもいたら、「ねずみくん、りんごが取れて良かつたね」で終わってしまいます。僕がこの本を読んで思ったことは、「作者は現実の世界と照らし合わせて、かげにいる人たちに気付いて助けたり、声をかけたり、寄りそつたりしてあげて、と伝えたいんじゃないかな?」ということです。現実の世界には、利えきを求めることがよく見えないことがあります。それに気付いてあげるとともに、寄りそつてあげて、伝えたいだと思います。

何が書いてあるかを瞬時に読み解き、自分の意見を述べる力もたしかに必要なのかかもしれません。だからといって、誰かに共感し、そつと寄り添ってあげられるような優しさに気付いたり、教室の仲間と語り合いながら人間の本質について考えたりする時を今後の学習会から、そして子どもたちから教わりました。午後の『おおきなかぶ』『くじらぐも』の学習も、模擬授業の形式でより実践的に学ぶことができ、早く1年生の担任になりたい！と思いました。

学んだことを現場の子どもたちに還元していけるよう、残り6回の学習会でも多くの力を付けていきたいです。

新年度も始まりました。4月が月曜始まりで、教師も子どもたちも忙しくして始まつた4月だつたようになります。コロナ禍の中で、ギガスクール構想が前倒しになり、子どもたちはタブレットを持ち、新たな一步を踏み出しています。ポストコロナの中で、依然と同じ学校に戻るなら、教師も子どももICT活用が増えているだけに、単純にすることが増

事務局通信

えていくはずです。これから教育に必要なものは、子どもたちにはどんな力が必要なのか、本当の意味で考えていく時期に来ているのだと感じます。4月になつて、学年でじっくり教材研究に取り組めたのは、たつた数時間です。その中で、「国語の授業が楽しみになりました」と若い先生から話を聞きました。嬉しい反面、そのたつた数時間しか時間がとれない現状と、教材研究が一緒にできる先生がどれだけいるのかと悲しい気持ちになりました。

困り感を抱えているのは子どもたちだけでなく、教師もです。今こそ文芸研が培つてきた実践や理論の出番です。困り感を抱えているなら、文芸研の運動が先生方の道しるべになるはずです。全国での皆様の活動を一步ずつ進めていきたいです。

さて、夏の大会に向けて、清田実行委員長をはじめ、山口東、広島、福山サークルの皆様が協力して、ハイブリッドでの大会を目指しています。全国各地でも春の国語の教室の開催で、宣伝も始まっていると思います。山口の地に文芸研の火がさらに灯り、広がるように、全国での呼びかけをよろしくお願ひします。今回の全国大会が来年に続くように、熱い夏に向けて全国の皆様と手を取り、前を向いていきたいと思います。

★文芸教育、授業シリーズについての呼びかけ・販売をお願いします。全国サークル委員が知恵と力を合わせて、作成しています。サークルでの文芸教育誌を使った学習も組織していきましょう。文芸教育誌での学びが理論面での確認にもなります。

★サークル会費納入お願い。新年度が始まりました。2023年度サークル会費の納入をお願いします。

12月26日（火）・27日（水）

冬の実践研（神戸）

8月26日（土）

サークル代表者会議

20時～オンライン会議

今後の予定

7月22日（土） 全国サークル代表者会議

20時～オンライン会議

7月29日（土） 全国サークル代表者会議

10時～現地山口で対面会議

体育を教えてきた経験上、ボールゲームでルールを教えるのが最も難しいのが、キックベースボール。打つ・守る・走るの走攻守の中で、走塁が特に難しい。イチローも、「走塁が一番難しい。」と語っています。

ランナーが詰まっているかや、アウトカウントで走る走らないが変わるし、打球方向によっても走るか留まるかの判断が必要です。ランナーに慣れていても、フライではなくランナーの場合、守備側が捕り損ねる可能性があるので、進むのかどうかの判断がより難しいです。

文芸研全国大会 山口大会

7月29日（土）・30日（日）

【事務局員の妄想日記】ある日の学級通信より

ライナーには気を付ける

金曜日は、初めてのキックベースボールを教える日でした。

私は、試合が進む中でパッと試合を止めながら、審判＆解説者のような形で参加。やはりみんなが走塁で一番難しい判断が、ライナー性の打球でした。ライナーが飛んだ時に、飛び出したらダメだと思い墨に戻ります。でも、守備側が捕れず。そうなると、瞬時にコロと同じプレーに変わります。ランナーが詰まっている場合は、進塁しないといけません。でも、ランナーに何が起きたか分からず、墨上に留まってしまうのです。何なら、守備側も拾ったボールをどうすればいいのか、分からぬのです。私は、ランナーにも守備側にも分かる指示を出しながら、何とか試合をしていました。

それでも、またライナーが飛ぶと似たようなことになりました。蹴る力のあるバッターの場合、打席に入る度に「ライナーには気を付けや。もし守りが落としたら次の墨に走るんやで。とにかくライナーには気を付けや。」とくり返しました。

一日疲れはしましたが、京阪樟葉駅のホームへ。おやつ。電車が来ている。ギリギリ間に合いました。何だかいつもと違う感じの新しい特急のようだ。ドアが閉まりそう。それでも、何とか電車に駆け込みました。

もう。座席へ。車内は広々としていて、カッヒウ

空いていました。しばらくす



止まりました。突然、声をかけきました。

「乗車券をお持ちでしょうか。」

「もしかして、これ、有料の特急ですか。」

「そうなんです。どちらまで。」

「丹波橋で乗り換えます。」

「それなら、300円になります。」

「そうですか。じゃあ。300円。これで。」

しまった…と思いました。いつもの特急と何ら乗り心地もスピードも変わらない特別な特急に、300円払うことになってしましました。ギリギリだったので、判断する余裕がありませんでした。

ちなみに、その特別特急には名前がありました。その名も「ライナー」でした。

今度は、自分に言い聞かせました。
「ライナーには気を付けろ。」と。

(完)